

間隔で行う。

▶ 自動ゼロ調整時、本品内部の吸引回路中の電磁弁を瞬時開放するため、吸引が約1秒間停止する。

#### 4) 圧力センサー異常チェック

圧力検出部に異常がないことを確認するため、次のチェックを行うこと。

① 吸引ラインをビニール鉗子等でクランプする。

② 吸引圧を $-50\text{ cmH}_2\text{O}$ に設定する。

③ その状態で一旦電源スイッチをOFFにする。

④ 再度電源ONし、センサーに異常があれば吸引・休止時間表示器に **Err0** が点滅表示され、同時にアラームが鳴る。

**関連注意** センサー異常の場合、修理が必要です。

#### 5) ドレンタンク

本品内に流れ込んだ排液等は、ドレンタンクに溜り、吸引ポンプを保護している。

#### 6) バックライト機能

ライトスイッチを押すと、ライトが排液バッグを照らし、夜間等での排液量確認が容易になる。

▶ ライトは1分後に自動消灯する。

### 5. 安全機能

#### 1) リークアラーム

吸引回路にリークがあり、設定圧に対し吸引圧が50%以上になった時にリーク表示器が点灯し、10秒以上この状態が続くと点灯が点滅に変わり、同時にアラームが鳴る。

#### 2) 高陰圧アラーム

設定圧に対し、 $-20\text{ cmH}_2\text{O}$ 以上の差違を検知した時に高陰圧表示器が点滅し、同時にアラームが鳴る。

#### 3) バッテリー残量アラーム

バッテリー駆動中、バッテリーの残量が少なくなりバッテリー残り時間約15分前になるとバッテリー運転表示器が点滅し、アラームが鳴る。

**関連注意** アラームが鳴ったときは、速やかにAC100V駆動に切り換えること。

#### 4) ロック機能

誤操作を防止するとき、ロックスイッチを0.5秒以上押し。

▶ ロック表示灯が点灯し、ライトスイッチ、一時消音スイッチ以外のスイッチ操作を不能にする。

**関連注意** 0.5秒以上押さないとON/OFFできない。  
[誤操作防止]

#### 5) 陽圧防止弁

患者の咳・くしゃみ等により発生する陽圧は、本品内部の陽圧防止弁が解除され、陽圧を大気開放する。

### 6. 終了

**関連注意** 本品の使用終了時には、患者に影響がないことを確認すること。

1) 吸引を停止する場合、患者ドレンチューブをビニール鉗子などでクランプする。

2) 電源スイッチを0.5秒以上押し、OFFにする。

**関連注意** 0.5秒以上押さないとON/OFFできない。  
[誤操作防止]

▶ 吸引が停止し、操作パネルのランプが消灯する。

3) 器械側接続チューブを排液バッグの吸引ポートから外す。

4) コネクター付接続管を患者ドレンチューブと排液バッグから外す。

5) 電源コードをAC100Vコンセントから外し、電源コードハンガーに巻く。

6) 排液バッグや排液バッグ内の内容物、コネクター付接続管は適切な方法で処理をする。

7) 他の患者に本機を使用する場合、又は 継続して使用しないときは、**【保守・点検に係る事項】**に従って、吸引回路を消毒・除菌する。

### 【使用上の注意】

**警告** ● 警報機能は、設定圧の50%以上のリークが発生した場合に動作します。ドレンチューブの外れや接続回路の接続不良等、全てのリークを検知するアラーム機能ではありません。\*

● 廃液バッグの水封部に気泡が発生し、圧力変動が生ずるた

め、本機能は約 $-8\text{ cmH}_2\text{O}$ 以下の設定圧では動作しないことがあります。また、併用するドレンチューブが細径であったり、長さ、側孔数等の形状及び延長チューブ等により流路抵抗が高くなるため、その圧力損失でリーク警報機能が動作する圧力まで低下しないため、本機能のランプ及びアラームは動作しません。リークの確認は、排液バッグの水封部の気泡の発生状態や吸引圧表示バーグラフの動作で確認すること。\*

● ドレンチューブに掛けたクランプを外す前に、排液バッグの水封部に発泡の有無を観察し、コネクター付接続管と排液バッグにエアリークがないことを確認すること。  
[リークにより吸引が不十分な場合は、肺の虚脱、気胸、皮下気腫等を生ずる恐れがある] エアリークの確認は、**【操作方法又は使用方法】2. 吸引クエアリークのチェック方法**を参照してリーク箇所を確認し、患者の状態及び機器の動作状態に応じ、適切な処置をすること。\*

● 吸引圧バーグラフ表示と設定圧が一致することを観察し、機械の回路にリークが無いことを確認すること\*

● 実際に患者側にかかる吸引圧は、設定圧に対して排液バッグの水封部の水圧差分( $2\text{ cmH}_2\text{O}$ )が低下するので、その圧力損失を含めて吸引圧を設定すること。水封による水位差約 $-2\text{ cmH}_2\text{O}$ 以下の吸引圧の設定では吸引しませんので、それ以上の設定圧で使用する事\*

● 胸腔ドレナージで排気によるエアリークがある場合には、水封部の気泡の発生が患者側のものか、吸引接続回路(排液バッグ、コネクター付接続管)のリークによるものかを確認して使用すること。\*

● 吸引中は常に適切なドレナージ管理を行い、ドレンチューブや吸引接続回路にリーク、閉塞、損傷等の異常があった場合には速やかに適切な処置を施すこと。\*

● 使用中は常に水封部の気泡の発生や吸引圧バーグラフの動作を確認しながら使用すること。エアリーク箇所が患者側にあるのか、器械側の接続回路又は吸引器にあるのか適切に確認すること。\*

● リーク警報機能は、すべてのリークの発生は検知できません。必ず、水封部の発泡や吸引圧バーグラフ表示等の状態を観察すること。\*

● 接続不良の場合には適切に接続を行い、製品に損傷などの異常が発見された場合には、新しいものに交換すること。\*

● 排液によるエアブロックや付着物による閉塞、またはシンク等がないことを定期的に観察すること。\*

**禁忌・禁止** ● 血液や体液及び泡沫などが排液バッグの所定容量を越えた場合、継続使用をしないこと。\*

● 血液や体液が所定容量をこえていなくても泡沫が所定容量を越えてウォータートラップ部に流れ込んだ場合は使用しないこと。(流れ込んだまま使用するとオーバーフロー防止弁のボールを押上げたり、装置側への流れ込みで吸引できなくなり、呼吸困難等になる可能性があります)\*

### 重要な基本的注意\*

1. 使用中は、ドレンタンクに排液などが溜っていないことを監視すること。[ドレンタンクの排液があふれると装置内の吸引回路にも異常を起こすことがある]

2. 血液や体液及び泡沫などの排液が排液バッグの容量を越えていないことを常に観察すること。万一、容量を目盛りを越えそうな場合には、速やかに患者のドレンチューブをクランプするなどの処置を行い、新しい排液バッグと交換すること。\*

[排液が排液バッグの容量を越えたまま使用を続けると装置の性能が悪化し、患者に悪影響をおよぼすことがある]

3. 本品の吸引回路は、高い陽圧が加わった時以外には積極的に大気開放を行う機能がありません。そのため、患者側にリークがない場合、下記①~④等により設定吸引圧以上の過剰陰圧が患者の体腔内に発生することがある。[医師の判断により状況に応じた定期的なドレナージ管理をすること]

① 現在設定している吸引圧より低く設定し直す場合

② 間欠吸引を行う場合

③ 患者に深呼吸、咳、くしゃみ等が発生した場合

④ ミルキングを行う場合

4. 患者からの血液や体液及び泡沫でドレンチューブ又はコネクター付接続管が閉塞し、吸引が効果的に行えない場合がありますので、定期的に監視し、ミルキング等を行い閉塞がないようにする

取扱説明書を必ずご参照下さい。

文書管理番号: A0-2011-07